式辞

はじめに、令和六年能登半島地震により被害に遭われた皆さまへ、心からのお見舞いを申し上げます。同時に、ご家族や大切な方々を亡くされた皆さまへ、謹んでお悔やみを申し上げます。

卒業生・修了生の皆さん、本日は誠におめでとうございます。ご家族の皆様におかれましても、藍野大学短期大学部の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、お忙しい所ご臨席賜りましたご来賓の皆様に厚く御礼申し上げます。

さて、卒業・修了に際して、「当たり前のことですが、気づきにくいこと・忘れてはいけないこと」をお話したいと思います。

本日、本学を卒業・修了し、四月からそれぞれの新しい道を歩んでいかれることと思います。多くの方が、患者さんや対象者を支援する対人援助職に就かれます。人を支援する際には、本学で培った知識や技術を活用することを意識しながらお仕事をされる

ことでしょう。しかし、今からお話しすることは自分で普段から意識しないと、なかなかできないこと、身に付きにくいことかもしれません。それは、「患者さんの少しの変化に気づく」ことです。例えば、皆さんが毎日のように同じ患者さんを担当した場合に、「昨日と比べて表情がいいな、あるいは一週間前と比べて表情が乏しくなっているな」など、少しの変化を意識的に考える癖をつけていただければと思います。人間は、自分の安心感を得るために、「相手は全く変わらない同じ人」であると判断する傾向があります。患者さんに寄り添うためには、自分の安心感を少し横において、患者さんの少しの変化を発見できる医療人を目指していただければ嬉しく思います。

保健師も全く同じです。看護師のように患者さんと接する機会はそれほど多くはないかもしれませんが、以前にお会いした時とどこが違うのか、何が変化しているのかを自分の感覚を鋭くすることによって観察していただきたいと思います。

相手の少しの変化を見出すことは、一朝一夕にはできるものではありません。私も若い頃に臨床にいたころは、「患者さんのためにという思いが強くなりすぎて、患者さんの少しの変化に気づきにくかったと思っています。この能力は臨床経験を積む中で、培っていくべき大切なことの一つであると考えています。

卒業生ならびに修了生の皆さんには、藍野大学短期大学部で学んだことを誇りに、「病める人々を医やすばかりでなく慰めるために」という教育理念を是非とも社会人になってからも思い出していただき、日々進歩する医療・保健の現場で、これからの専門職人生を歩み続けていただきたいと思います。

今後、臨床現場で本学出身の先輩方に出会うことも少なくないと思います。皆さんが社会へ旅立たれた後も、私たちは皆さんを応援し続けますが、多くの先輩方もきっと皆さんの味方になってくれると思います。

結びになりますが、看護師あるいは保健師として、そして社会人としてのご活躍とご多幸を心からお祈りし、私からの式辞といたします。

本日は誠におめでとうございます。

令和六年三月十五日

藍野大学短期大学部

学長　足利　学